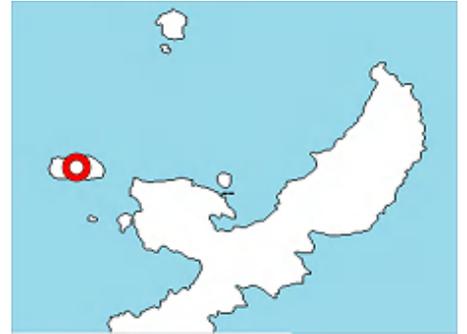


大城安信さん

1935(昭和10)年6月生まれ

民間人

戦地 伊江島



●1944(昭和19)年10月 1回目の空襲

●1945(昭和20)年1月22日 2回目の空襲

この時は爆弾による攻撃があり、家(自宅)はその時に焼けた。赤瓦に大きな家があつちとこつち、近くに2軒あって日本兵も入っていた。そこを目がけたと思うがうちが攻撃されてしまった。あれ以来、こつちでやられればまた逃げる場所を作って避難の繰り返しに。道に爆弾で直径15m、深さ7mぐらいの穴が空いて、皆びっくりして見に来た。陣地も山中に移動した。

●1945(昭和20)年4月14日 米軍による艦砲射撃が始まる

船を通して海を渡っていけないのではないかと思えるぐらいいっぱい艦船が島を取り囲んだ。

夕方5時半～7時ごろ、艦砲射撃がない時間。上の森から3機編隊の特別攻撃隊が見え、1機が艦船に当たって火柱が上がったが、後は被弾して海に沈んだ。

●1945(昭和20)年4月16日 米軍伊江島に上陸

朝8時から5時まで20mm機関砲でバラバラバラバラ、飛行機が旋回しながら頭の上に撃って来る。焼夷弾も落とされる。森の木の下やアダンの中に避難。怖かったが全員無事でアハシャガマに避難せよとの命令。

日本兵に仕込まれている少年は、「アメリカ兵を1人も殺さずに死ぬるか」と爆雷を持ってガマから出た。戦車がいっぱい来ている。14歳だった。帰りがなく、下半身はなかったけれど、上半身をみつけて担いできて、夜、ソテツ畑の中に5～6名で埋めた。

●1945(昭和20)年4月23日 一門のガマでの“集団自決”

前日の4月22日に150人が避難している向かいのアハシャガマで、防衛隊員が持ち込んだ爆弾で、数人以外の全員が自決したことを聞く。大城家のガマには24名が入って、父ともう1人がガマに入れず入り口の側にいた。

23日、「今、死ぬから固まれ」と言われ、私は母に抱っこされていた。(母の3人となりの少年が)20～25cmぐらいの爆雷を爆発させたが爆発力が弱く、耳がつぶれた者が多く出たが死ぬなかった。2回目の爆発で皆が死んでおとなしくなった。24人の中では母と自分だけが生き残った。外にいた父も生き残った。この一門の本家なので自分達だけが残されたかなと思うことがある。

頭が五つ転がっていて、一つは2級先輩、あとは顔が分からなかった。

破片がとんで左足の付け根と膝をやられ、うちが痛くて泣き始めると、父が「生きていたのか」と言って首まで埋まっているのを出しておんぶして外に逃げた。「お母さん生きてるよー」と言ったけど、父は「あれは死んだ」と捨てた。

母は11日目に黒人兵に助けられた。耳をやられ全く聞えない、全身打撲だったが傷は爆風の小さなものだけ。水も飲めず、尿も出なくなっていたが、ようやく動いてたので。父と野戦病院で再会した。

姉は自決のことを聞いて見に来て、生きていたと家族の無事を確認して帰っていったが、それが会った最後、陣地で爆弾でやられて死んだ。頭を丸められて、日本軍の飯炊きのようなことをやっていたらしい。

●収容所へ

米兵は髪が真っ赤で、皆同じ顔に見えた。歓迎するようにズラツと並んでいたが、チョコレートもらったが、毒と思って捨てた。

私たちは野戦病院へ、元気な者は慶良間諸島に送られた。

その後自分達も渡嘉敷を経て、本部の米軍のテントの収容所で6～7ヶ月過ごした。この時は名護に芋を買いに行く。母の通訳も必要だし、芋10～15キロを背負って10キロほど歩くのは大変だった。親父が竹細工をして収入を得た。

知り合いで夫婦でうちにも来たりしていた人が、最高の竹やりを持っていたが、赤と白の手旗を持っているのがバレて、渡嘉敷に行ってから日本兵に呼び出されスパイとして殺された。あの人のおかげで助かった人もいる。英語ができたので。30代～40過ぎの人。

その後伊江島の東ばるにかまぼこ型の集合住宅が40～50作られ部落ごとに入った。この部落で7～10棟ぐらい。
(取材日:2011年2月4日)